

IV 実践研究 — 高等部 —

1 はじめに

高等部では、研究主題における「個が生きる授業」を「人と関わり合いながら、自信や責任感をもって活動に取り組んだり、挑戦したいという気持ちが湧き上がったりするような授業」と定義し、授業づくりに取り組んだ。

これまで高等部では、授業を担当する複数の教師がチームとなり、話し合って単元を構想し、実践する中で生徒の学びの姿を捉え、その学びを次の授業づくりに生かしながら取り組んできた。前研究から、生徒の学びの姿を捉えることを大切にしながら授業づくりをしてきているが、各教科の内容に関わる生徒の学びを捉えたり、授業づくりに必要な学習評価の内容や方法を明確にしたりすることには課題があった。

本研究では、作業学習の授業づくりを通して、「指導と評価の一体化」に基づいた個が生きる授業づくりの過程を整理して示すとともに、そのような授業づくりにおける重要な視点について検討する。

2 対象授業

高等部では、作業学習の農耕班と陶芸班を研究の対象授業とした。農耕班では野菜の栽培と販売、陶芸班では備前焼の製作と販売の作業を中心に行っている。高等部の作業学習は1日4時間の授業を週3回行っている。それぞれの作業班に、各学年の生徒4人、計12人が所属している。1年生は前期、後期で作業班を交代し、どちらの班も体験する。2年生からは、本人の希望と教師同士の話し合いを基に所属する班を決め、卒業まで同じ班で活動する。全ての教師が作業学習の指導を行い、生徒3～4人に対して、教師1人の割合で指導にあたっている。

3 研究の経過

(1) 「指導と評価の一体化」に基づいた授業づくりの過程

高等部では、これまでも様々な視点で検討し

ながら授業づくりを行ってきたが、「指導と評価の一体化」という視点から、授業づくりの過程や授業づくりに必要な情報の検討をすることには至らなかった。そこで、まず授業づくりの過程を検討することにした。農耕班と陶芸班がそれぞれ連続する二つの単元について、授業の設計→展開→評価のプロセスで授業づくりを行い、それを基に授業づくりに必要な情報と大切にしている視点について検討し、授業づくりの過程図を作成した(図31)。さらに、この過程図に基づいて授業実践を行い、過程図の改善も行った。なお、過程図の左側は授業づくりの過程、右側には授業づくりに必要な情報と大切にしている視点を示している。

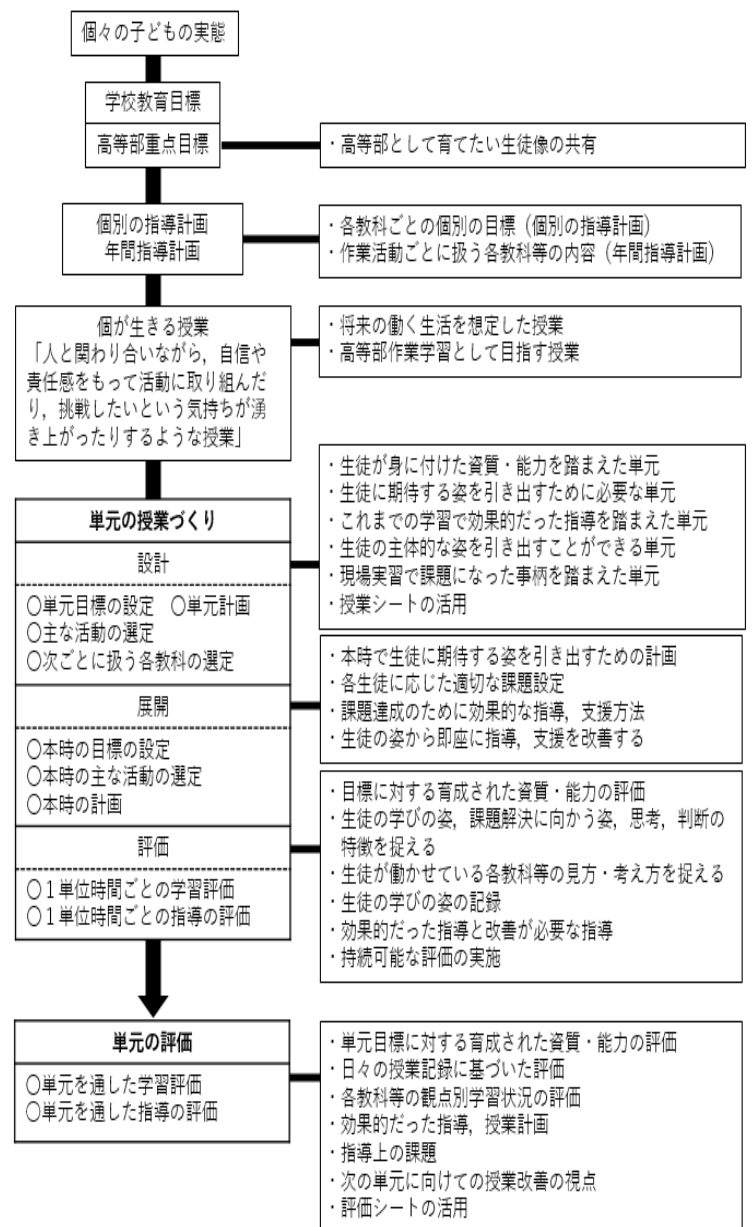


図31 本校高等部作業学習における授業づくりの過程

(2) 高等部として育てたい生徒像の共有と一貫性のある授業づくり

これまで高等部では、それぞれの教師が学部
の重点目標を把握していたが、その捉え方は教
師によって、いくらか異なっていた。そこで、
年度初めや夏季休業中に高等部として育てたい
生徒像について話し合い、共有した。話し合い
の中では、それぞれの教師が、これまでに関わ
った生徒の姿について、「高等部として育てたい
姿」だと感じた具体的なエピソードを出し合い、
共有した。そのことにより、育てたい姿へのイ
メージを具体化し、高等部の教師が授業や指導
の方向性を共通理解することができた。

(3) 扱う各教科の内容の明確化

これまでの高等部の作業学習では、作業活動
における生徒の姿を評価して指導や支援を行っ
てきたが、教科の視点をもった指導や評価は必
ずしも十分とは言えなかった。そこで、年間指
導計画に作業工程ごとに扱う各教科の内容を示
したり、単元構成時に扱う各教科の内容を検討
したりすることで、授業の中で教科の視点をも
って指導することができた。また、生徒の学び
を教科の視点で評価したり、生徒が働かせてい
る教科の見方・考え方を捉えたりすることがで
きるようになった。

(4) 持続可能な評価方法の検討

本校高等部の教育課程では、作業学習の授業
時間が多くの割合を占めている。そのため、1
単位時間ごとの学習評価を日々丁寧に行ってい
くことは、現実的ではなかった。そこで、持続
可能な評価方法の検討を行い、作業学習で既に
活用していた作業日誌を評価の一部として活用
することにした。授業の始めに、日誌を使って
生徒と一緒に本時の目標を共有し、その共有さ
れた目標の達成に向けて生徒と教師が取り組み、
授業の終わりに成果や課題、学んだことなどを
振り返り、評価をした。これにより、教師と生
徒が共有した目標の達成に向けて取り組むこと
ができ、生徒の課題意識と主体性を引き出すこ
とができるとともに、日誌を家庭に持ち帰るこ

とで保護者と連携して指導することにつながっ
た。また、日誌に記入する内容を検討し、改善
することで、評価の一部として扱うこともでき
た。さらに、日誌の画像を教師のタブレット端
末に読み込み、日誌に書かれたこと以外の内容
も後程書き込んで保存することができるように
した。この取組により、持続可能な評価にする
ことができた。

(5) 「指導と評価の一体化」に基づいた授業づくりにおける重要な視点と意義

高等部での検討によって導き出した『指導と
評価の一体化』に基づいた授業づくりにおける
重要な視点』としての五つの視点とその意義を
表 10 に示す。

表 10 「指導と評価の一体化」に基づいた授業づくりにおける重要な視点と意義(高等部)

重要な視点	高等部における意義
①個別の指導計画と年間指導計画の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人の各教科の目標を共通理解し、目標に沿った指導をすることができる。 ・年間指導計画に扱う教科の内容を示すことで、教科の視点をもって指導と評価を行うことができる。また、生徒が働かせている各教科の見方・考え方を捉えたり、新たな見方・考え方を獲得するように指導したりすることができる。 ・生徒と教師が共通の目的や目標をもち、授業が展開されることで、生徒の学びを引き出すことができる。
②児童生徒の姿のイメージ化と捉え方	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が働かせている各教科の見方・考え方を捉えることで、新たな見方・考え方に気付いたり、働かせたりするように指導することができる。 ・生徒の思考、判断の特徴を捉えることで、教師が教える場面や生徒が考える場面を適切に設定することができる。 ・教師が捉えた生徒の姿をフィードバックすることで、生徒は自らの成長や課題、特徴などに気付き、強みを生かそうとしたり、課題意識をもととしたりすることができるとともに、進路選択や将来の生活に学びを生かすことができる。
③単元計画と評価計画	<ul style="list-style-type: none"> ・授業担当教師が話し合い、生徒が身に付けている資質・能力を多角的に捉え、次の単元で身に付けさせたい力を検討することで、単元構成が明確になる。 ・個別の指導計画と関連付けながら、次ごとに扱う各教科の内容を検討することで、教科の視点をもって指導することができる。 ・持続可能な評価の方法を検討し、実施することで継続して授業改善をすることができる。
④授業記録に基づいた単元の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の丁寧な振り返りや授業記録により、生徒の変容や身に付けた資質・能力に気付きやすくなり、単元の評価に根拠をもつことができる。 ・教科の視点をもって授業を記録し、その記録に基づいて単元の評価をすることで、授業内で扱っている教科の内容の偏りに気付きやすくなり、授業改善につながる。
⑤チームでの目標・評価の共有	<ul style="list-style-type: none"> ・教師がそれぞれの生徒の目標を共有することで、生徒一人一人が身に付けている資質・能力や課題を把握し、どの教師が指導をする際にも一貫した指導を行うことができる。 ・定期的に授業担当教師が集まって生徒の姿や授業について話し合うことで、生徒の姿を多角的に捉えたり、授業改善をしたりすることにつながる。

4 指導の実際

(1) 設計

個別の指導計画では、年度初めに前年度の個別の指導計画、これまでに身に付けた資質・能力、生徒の学習の様子などを基に、担任が各教科の目標を設定した(図 32)。

職業科	前期	①作業時に使用する道具の名称や扱い方を理解し、作業課題に応じて正しく扱うことができる。
		②販売できるかどうか等の基準が分かり、基準に沿って確実に作業を行うことができる。

図 32 個別の指導計画(例)

年間指導計画については、学習指導要領や、個別の指導計画に示した各教科等の目標、これまでの学習で効果的だった単元構成と指導方法などを踏まえて、授業担当教師が集まって検討し、作成した(図 33)。また、作業活動ごとに扱う各教科の内容を示すことで、教科の視点をもって指導できるようにした。

次に、授業シートを活用しながら単元計画を作成した。まず、授業担当教師が集まり、これまでの評価を踏まえながら単元設定の理由、本

単元を通して期待する生徒の姿、単元目標、個別の単元目標、単元計画、次ごとの主な活動内容、次ごとの全体目標、次ごとに取り扱う各教科の内容、評価の計画について検討した。さらに、個別の生徒の目標についても話し合うことで、一人一人の生徒の目標を共有して授業を行うことができるようにした。

次ごとに取り扱う各教科の内容では、その次特有の学習活動に関連する教科の内容を示すことで、単元の計画に沿いながら教科の視点をもって指導したり、評価したりしやすくなった。

評価計画では、次ごとに、いつ、どの場面の姿を評価するか、また、生徒の学びにとって重要となる自己評価・他者評価の捉え方について検討し、評価計画を作成した(図 34)。さらに、持続可能な評価とするために、作業日誌も活用して評価することとし、生徒が自らの学びを振り返り、次の学習につながる日誌となるように改善した(図 35)。

作業工程	活動内容	ねらい	教科
袋詰め	・収穫した野菜をはかりで量って袋やパックに入れ、口を留める。	・電子はかりを使って、決められた重さになるように組み合わせを考えながら量る。	数学
		・手順書を参考に、野菜の向きや入れ方に気を付けたり、決められた大きさの袋に入れたりすることができる。	職業
		・お客さんの視点で、商品の見栄えや量を考えて袋詰めをすることができる。	職業
		・ツールを活用して袋に入れたり、バックシーラーを扱って袋の口を留めたりすることができる。	職業

図 33 年間指導計画(例)

これまでの評価を踏まえた単元設定（本単元を通して期待する姿）

1年生は、高等部に入學したばかりではあるが、これまでの経験から野菜や農耕作業に興味をもち、主体的に作業に取り組もうとしている。

2、3年生は、これまでも注文販売の経験があり、お客さんからのフィードバックを励みにして、野菜を育てることや販売することへの意欲が高まっている。作業面では、野菜の収穫の際に、スケールを使用して大きさを測ったり、葉や実の状態をよく観察したりしながら、基準に合った野菜を収穫しようとする姿が見られる。また、葉の切り口が斜めになったり、力を入れ過ぎて葉を折ってしまったりすることがある。洗浄作業では、野菜の向きを変えながらブラシで洗ったり、溜めた水に野菜をつけて手でこすりながら洗ったりする姿が見られる。また、土や汚れの有無に気付きにくかったり、洗浄後の確認が不十分のために土や汚れが残ったままになったりすることがある。袋詰め作業では、袋詰め基準書を見ながら計量し、決められた大きさの袋に入れたり、袋詰めがしやすくなるツールを活用して根や葉の向きを揃えて袋に入れようとしていたりする姿が見られる。また、袋の口が開いたままになっていることに気付かなかったり、葉が折れたままの状態の販売したりしようとしていたりすることがある。そのため、本単元では、お客さんが喜ぶ商品かどうかという視点で、野菜の状態や袋詰めの見栄えなどを考えて作業する姿、道具を正しく扱って野菜を収穫したり、土や汚れの有無を確認しながら洗浄したりする姿をねらいとしている。また、近隣の幼稚園への注文販売をすることで、多くの保護者からのフィードバックを受けることができるとともに、今後も定期的な注文販売を実施することができ、次の販売に向けて生徒が主体的に工夫、改善していこうとする姿が期待できると考える。

単元目標（全体）

お客さんが喜ぶ商品を作ることを意識し、決められた分量の野菜を収穫して土や汚れが残らないように洗浄したり、見栄え良く袋詰めしたりして販売することができる。

単元に関する実態と単元目標（個別）

A	<p>【目標】</p> <p>○お客さんのアンケート内容を読み取り、ニーズに気付いたり、喜ばれる商品を作ろうとしていたりすることができる。</p> <p>○販売可否の基準が分かり、土や汚れが無くなるまで洗浄したり、見栄え良く袋詰めしたりすることができる。</p>
---	---

単元計画と評価計画

第四次「幼稚園で注文販売をしよう」	<p>【主な学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内販売のアンケートを基に改善点を考える ・野菜の状態や見栄えを考え、収穫、袋詰めをする ・注文書の内容を読み取って、必要な個数を収穫、袋詰めする ・注文者ごとに商品を仕分けて袋に入れる ・商品を幼稚園に配達する ・代金とアンケートを受け取る
<p>【取り扱う各教科の内容】</p> <p>国語：思考力、判断力、表現力等 A聞くこと・話すこと 相手や目的に応じて自分の伝えたいことを明確にすること。</p> <p>国語：思考力、判断力、表現力等 C読むこと 日常生活や社会生活、職業生活に必要な語句、文章、表示などの意味を読み取り、行動すること。</p> <p>数学：知識及び技能 A数と計算 2位数の加法及び減法について理解し、その計算ができること。また、それらの筆算の仕方について知ること。</p> <p>職業：思考力、判断力、表現力等 A職業生活 作業の確実性や持続性、巧緻性等を高め、状況に応じて作業すること。</p> <p>特別活動：思考力、判断力、表現力等 集団をよりよく改善したり、主体的に社会に参画し形成したりするために、自他のよさや可能性を發揮しながら、主体的に集団や社会の問題について理解し、合意形成を図ってよりよい解決策を決め、それに取り組むこと。</p>	
<p>【評価の計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・販売アンケートを基に、同じグループの友達と話し合って改善点を考える様子。 ・お客さんが喜ぶ商品を作ることを意識して、収穫や袋詰めなどの作業に取り組む様子。 ・注文書の内容を読み取って、収穫や商品の仕分け作業をする様子。 ・アンケートで、お客さんからのフィードバックを受ける。 ・商品の受け渡しを通して、自分たちの活動に対する達成感や満足感を得る。 	

図 34 授業シート（例）

目標	
内容	
評価	
農耕班	

陶芸班作業日誌(いこみ班用)	
1. 作業内容	型外し・道具の準備・ゴム付け・いこみ・ブラシ掃除・ひっくり返す・こす
2. 目標	
3. 目標の反省	
4. 課題	
5. ほめられたこと、よくできたこと	
6. 先生より	
7. 家庭より	

図 35 改善された作業日誌の一部(左：農耕班，右：陶芸班)

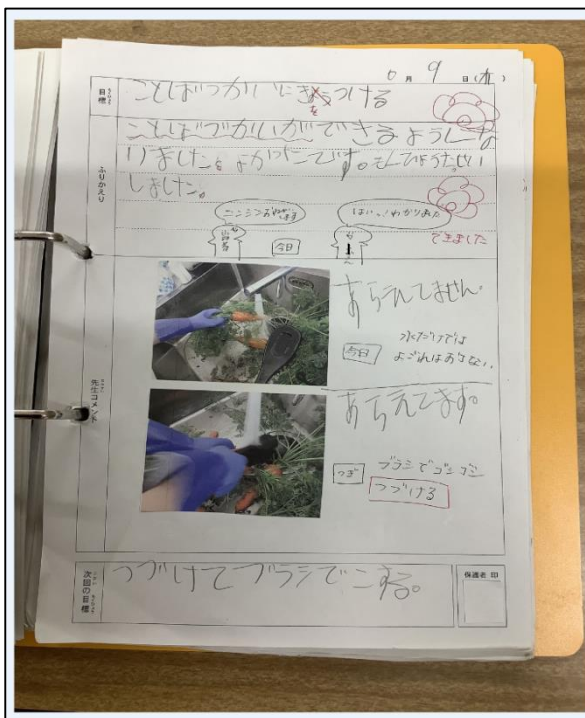
(2)展開

本時の授業を行う際には、これまでの学習を踏まえ、各々の教師は、担当する生徒の本時の目標と授業計画を考え、授業を実施した。あらかじめ本時の目標を具体的な行動の姿として設定しておき、授業の始めに各生徒と前時までの学習を振り返ったり、本時の目標を確認したりして生徒と目標を共有することで、その目標達成に向けて共に取り組むことができた。これにより、生徒が自ら目指す姿と教師の願う姿が重なることが増え、生徒と教師が共通の内容を評価することができた。

授業の振り返り場面では、各生徒が本時の学

びと課題について振り返ることができるように、生徒の実態に応じて作業日誌の形式を工夫したり、写真や実物を用いたりしながら教師と一緒に振り返るようにした。教師との丁寧な振り返りにより、生徒は自らの学びや次時の課題に気付くことができた。

日々の授業実施後の評価については、タブレット端末を活用して行った。教師のタブレット端末に本時の日誌を画像データとして取り込み、その画像の隣に、教科の視点での評価や授業中の生徒の様子、授業の改善点など、日誌に記入していない内容を書き込み、日誌と合わせて日々の評価とした(図 36)。



指導をされた際には、わかるところは適切な言葉でかいで伝えることができた(国) 友達や他の教師ともできるかは不明、実習生には時々Xロになりやあ。よ！言葉が名人！などでもちあげると意欲が持続しやあ。洗いの作業で洗い戻しが多い。ブラシをぬって「ゴシゴシ」確認音語で伝えると、ちゃんと分かったかな？ゴシゴシが、途中やめになりが「自分の」扱はつづけて二あり→次のステップで洗いや土に注目して洗うかな～やりながら指導方法と方針を考えている！

図 36 日々の評価

(3) 評価(単元)

単元終了後、各生徒の単元目標に対する評価について、担当教師が記録した日々の評価を持ち寄って作業班の教師で話し合った。話し合いを通して、生徒の姿を多角的に捉えたり、効果的だった指導や授業の改善点に気付いたりする
○単元を通して見られた生徒の姿

- ・アンケート結果から、見た目が良い商品がお客さんに喜ばれることや量や価格が適切であったこと、次に作ってほしい野菜などに気付くことができた。また、お客さんの意見を聞くことで「やった。うれしいです」と言い、自分が行った作業への達成感や満足感を感じる事ができた。
- ・野菜の洗い終りに教師と汚れの有無を確認したり、洗い終わった野菜の写真を提示しながら一緒に振り返ったりすることで、販売可否の基準が分かり、土や汚れが無くなるまで洗うことができた。また、基準表の内容を予め教師と確認してから作業することで、はかりを使って、自ら決められた量の野菜を袋詰めしようとする事ができた。

○単元を通した教科の内容に対する観点別評価

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
(職業科)販売可否の基準が分かり、基準に沿って商品を作ることができた。(A 職業生活/イ 職業/(ア)/④作業の確実性や持続性、巧緻性を高め、状況に応じて作業すること。) (数学科)はかりを使って数値を正しく測定することができた。(C 測定/ア/(ア)/④長さ、重さ及びかさについて、およその見当を付け、単位を選択したり、計器を用いて測定したりすること。)	(職業科)教師との振り返りを通して自らの課題を考え、次時の目標を立てることができた。(A 職業生活/イ 職業/(イ)/⑦作業や実習における役割を踏まえて、自分の成長や課題について考え、表現すること。) (国語科)アンケートの結果を読み取り、お客さんのニーズに気づき、表にまとめることができた。(C 読むこと/ウ/日常生活や社会生活、職業生活に必要な語句、文章、表示などの意味を読み取り、行動すること。)	(職業科)お客さんからの意見を聞き、達成感や満足感を得ることができた。(A 職業生活/ア 勤労の意欲/(ウ)/作業や実習等に達成感を得て、進んで取り組むこと。)

図 37 単元を通して見られた生徒の姿と単元を通した教科の内容に対する観点別学習状況の評価

5 今後の課題

本研究の取組を通した、今後の課題について、以下に示す。

(1) 個別の指導計画の活用と授業間のつながりと積み上げ

本校高等部の個別の指導計画では、各教科の目標が設定されている。年間指導計画作成時には、生徒個々の個別の指導計画の内容を加味しながら計画を立てる必要があるが、縦割りでの授業であるため学年によって既習事項や経験が異なること等の要因から、個別の指導計画を有効に活用して年間指導計画が作成されていないことが現状である。また、高等部の教育課程では、作業学習や生活単元学習といった、各教科等を合わせた指導の時間を多く取り入れており、

ことができた。また、話し合いを受け、担当教師が単元を通した教科の内容に対する観点別学習状況の評価を行った(図 37)。この際には、話し合った評価と日々の評価を基にすることで、根拠のある評価を行うことができた。

個別の指導計画で示された各教科の目標を、どの授業で、どの程度学習するかは明確ではなく、授業間での評価の共有が必ずしも十分とは言えない。そのため、例えば作業学習で身に付けた各教科等の資質・能力を、生活単元学習等その他の授業でも発揮するためには、身に付けた資質・能力を授業者間で互いに把握し、授業を行う必要がある。

(2) 偶有性のある学びをした際の評価の扱い

授業の目標や扱う教科の内容については、個別の指導計画、年間指導計画に基づき、単元計画や本時の計画などにおいて、授業前に想定されている。しかし、実際に授業を行う中で、生徒が教師の想定を超えた学びや目標とは異なる

学びをすることがある。特に、各教科等を合わせた指導においては、生徒が真剣に学習活動に取り組む中で、生徒の意識の流れや興味・関心、気付き、思考の仕方などに沿いながら授業が展開されるため、その時々生徒の姿に応じて臨機応変に授業を改善したり、指導内容を変更したりする必要がある。そのように、教師の想定とは異なる、目標が明示されていない学びの評価の扱いについて、教師の間で共有しておくことが必要である。